

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

守屋三千代・池上嘉彦編集代表、角道正佳・栗林裕・岡智之・宮岸哲也編『「ナル的表現」をめぐる通言語的研究——認知言語学と哲学を視野に入れて——』

本書は、日本語の動詞「ナル」を出発点として、通言語的な観点から「ナル相当動詞」「ナル的表現」を記述し、「ナル的」なる概念とは何かを追究した論文集である。日本語（古代語・現代語）のナルだけでなく、世界中の「ナル」相当表現を数多く分析している。後半には「ナル表現」「ナル的表現」の言語学的考察及び哲学的考察を収める。

本書は全4章からなる。章立ては「第1章 「ナル的表現」研究の現在」「第2章 世界の「ナル的表現」」「第3章 「ナル的表現」の言語学的考察」「第4章 「ナル的表現」の哲学的考察」。以下、章ごとに説明する。

「本書の概要（守屋三千代）」に続き、第1章では、「第1章-1 調査項目の分析」として以下の5編を収める。「日本語の「ナル表現」と調査項目の概要（守屋三千代）」「朝鮮語の「ナル的表現」（岡智之）」「モンゴル語の「ナル的表現」（角道正佳）」「トルコ語の「ナル的表現」（栗林裕）」「シンハラ語の「ナル的表現」（宮岸哲也）」。続く「第1章-2 「ナル的表現」とは何か 出来・存在・変化の観点から考える」には、以下の5編を収める。「創世記から「出来」と日本語の「ナル」を考える（守屋三千代）」「出来・存在・変化の観点から考える——モンゴル語のBOLの用法「～になる／～である」——」（角道正佳）」「トルコ語の「ナル的表現」——トルコ語版 創世記から——（栗林裕）」「旧約聖書創世記第1章クルド語翻訳を題材としたクルド語の「ナル的表現」（岡智之・COLAK Vakkas）」「シンハラ語版創世記に見る「ナル相当動詞」——出来・存在・変化・コピュラとしての意味・機能——（宮岸哲也）」。第1章-3 『星の王子さま』から見えること」には、以下7編を収める。「日本語訳とトルコ語訳の対照——「星の王子さま」から見えること——（栗林裕）」「日本語と朝鮮語の「ナル的表現」の対照——「星の王子さま」から見えること——（岡智之）」「日本語訳とモンゴル語訳の対照——「星の王子さま」から見えること——（角道正佳）」「日本語訳とシンハラ語の「ナル相当動詞」との対照——「星の王子さま」から見えること——（宮岸哲也）」「日本語訳と英語訳の対照——「星の王子さま」から見えること——（守屋三千代）」「日本語訳とフランス語（原文）・ポルズ語訳・ウーリ語訳・ドイツ語訳との対照——「星の王子さま」から見えること——（岸ZGRAGGEN Evelyn）」「フランス語（原文）と日本語訳の対照——「星の王子さま」から見えること——（RENOUD Loïc・栗林裕）」。

第2章には、以下の20編を収める。「現代日本語の「ナル表現」——主観的把握の観点から考える——（守屋三千代）」「日本古典文学における「ナル表現」（山本美紀）」「朝鮮語の「ナル的表現」の諸相（岡智之）」「モンゴル語の「ナル的表現」（角道正佳）」「ヤクート語の「ナ

的表現」について（南謙吾）」「トルコ語とチュルク諸語の「ナル的表現」（GENÇER BALOĞLU Zeynep・栗林裕）」「中国語の「ナル的表現」（徐一平）」「ゾゾ語の「ナル相当動詞」（宮岸哲也）」「ベトナム語の「ナル的表現」（清水政明）」「サンスクリットにおける「ナル的表現」——動詞語根 bhū- の用例——（工藤順之）」「ペルシア語の「ナル的表現」šodan の対応可否について（JAY Behnam）」「クルド語の「ナル的表現」（岡智之・COLAK Vakkas）」「シンハラ語複合動詞における「スル／ナル／サレル的表現」（DE SILVA Kalugala Gayathri Kaushakie・宮岸哲也）」「現代ヘブライ語における「ナル的表現」に関する一考察——動詞‘sa’を中心に——（平岡光太郎）」「アラビア語の「ナル的表現」（柳谷あゆみ）」「ロシア語における「ナル的表現」（LATYSHEVA Svetlana）」「ポーランド語の「ナル的表現」（JABŁOŃSKI Arkadiusz）」「ドイツ語の「ナル的表現」（三瓶裕文）」「フランス語の「ナル的表現」（RENOUD Loïc・栗林裕）」「チェコ語、リトアニア語、ルーマニア語、ブラジル・ポルトガル語、ハンガリー語、ハンガリー語トランシルバニア方言、バスク語（および、英語）における「ナル」相当動詞（池上嘉彦）。

第3章には、以下の6編を取める。「「ナル的表現」と事態把握（池上嘉彦）」「言語類型論から見た「ナル的表現」（角道正佳）」「翻訳小説の文末の OL-/BOL-/BO'L- の数量的比較——トルコ語、アゼルバイジャン語、ウズベク語訳の『星の王子さま』——（栗林裕）」「ナル的授与動詞構文と「ナル（相当）動詞」構文（宮岸哲也）」「「ナル的表現」のスキーマをめぐって——出来文、中動態との関連から——（岡智之）」「『古事記』と『古事記傳』から見た「ナル」の意味（守屋三千代）」。

第4章には、以下の4編を取める。「創世記1章1節-2章3節と出エジプト記3章における動詞 *h-y-h* ——（越後屋朗）」「「ある」の哲学、そして「なる」の神学——永遠と時間とのほごまで何が語られうるのか——（山崎達也）」「アラビア哲学における存在と生成（小村優太）」「サンスクリット古典文学に規定される動詞複合語——「状態の変化」を動詞形に表現する事例のひとつとして——（工藤順之）」。

最後に「あとがき（池上嘉彦）」「索引」「論文執筆者一覧」「調査結果担当者一覧」を付す。（竹村明日香）

（2025年3月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 524頁 定価9,900円 ISBN 978-4-8234-1200-4）

梶村光郎著『方言札の近現代史——沖縄言語教育の研究——』

沖縄の標準語教育の歴史において、規範的な日本語を教育・普及・励行する目的で、学校で方言を使用させないように用いられた方言罰札（方言札）の存在が知られる。本書では、そうした方言札の実態、すなわちいつからいつまで、どのように用いられたのかについて、多岐にわたる調査から明らかにしている。特に綴方教育の実践に注目し、沖縄における言語教育の歴史を描き出している。

本書の構成は以下のとおり。序に続き、「第一章 沖縄における方言札の出現」「第二

章 篠原一二の標準語教育実践」「第三章 明治期沖縄の綴方教育と標準語励行」「第四章 大正期沖縄の綴方教育と標準語励行」「第五章 岩崎卓爾の地域語・標準語併用の教育文化活動」「第六章 『児童の産業』掲載の綴方作品の傾向と教育的意味」「第七章 昭和初期の標準語励行と綴方教育」「第八章 方言礼体験調査から見た戦前・戦後の標準語励行」「第九章 戦後沖縄の作文教育運動」。次いで「補章 ベトナムの少数民族教育と教員養成——タイグエン師範大学の場合——」と終章を置き、末尾に「あとがき」「沖縄言語教育関係年表」「人名索引」を付す。(川島拓馬)

(2025年5月25日発行 不二出版刊 A5判縦組み 314頁 定価7,150円 ISBN 978-4-8350-8833-4)

眞野美穂・江口清子・小葉哲哉・于一楽編著『レキシコン研究の広がりと深まり』

本書は、目覚ましい発展を遂げるレキシコン研究の広がりと深まりを多層的に示すことを目的として編まれたものであり、語彙意味論的・形態論的研究と統語論的研究という2つのアプローチを縦軸と横軸に据えている。論文集という形をとることで、研究上の理論的枠組みや着眼点、考察対象とする言語といった点で多角的なアプローチを有することが可能となっている。

本書は全2部24章からなる。「序章(眞野美穂・小葉哲哉・江口清子・于一楽)」に続き、「第1部 語の意味と生成」には「第1章 複合動詞から見る「語」の多面性(由本陽子)」「第2章 状態を表す英語の名詞転換動詞と名詞のクオリア構造——形状を表す名詞からの転換を中心に——(伊藤たかね)」「第3章 コショウも骨も移動する——ハンガリー語の名詞派生動詞からの一考察——(江口清子)」「第4章 統語的複合動詞 V-kir における意味の修復(日高俊夫)」「第5章 助数詞の種類とクオリア構造——構成メカニズムの再検討——(眞野美穂)」「第6章 「名詞句_i-の-ような-名詞句」の推量読みについて(板東美智子)」「第7章 語頭に重音節を持つ和語動詞——関係形態論の観点から——(秋田喜美)」「第8章 派生語・複合語形成における NCC と ACC の妥当性の検証と言語学的意味(高橋勝忠)」「第9章 数量名詞の語彙的・統語的性質(前川貴史)」「第10章 漢語動詞の項のあらわれ方について(小林英樹)」「第11章 中国語「過」と「過ぎる」との対照研究——両者の対応関係を中心に——(王蓓淳)」を収める。「第2部 文の生成と意味」には「第12章 名詞化接辞「-方」の意味と構文をめぐる考察(杉岡洋子)」「第13章 get a look の語彙意味論——give a look との比較を通して——(小葉哲哉)」「第14章 非能格の「する」構文に関する一考察(臼杵岳)」「第15章 A structural analysis of deverbal compounds with “one” in Japanese (Yuta Tatsumi)」「第16章 日本語の「与格交替」再考——イディオムからの考察——(工藤和也)」「第17章 経験主の語彙表示をめぐる考察——心性的与格の用法を中心に——(今泉志奈子)」「第18章 日英語の結果構文——生産性と非生産性——(山口真史)」「第19章 英語結果構文から見た「様態」と「結果」(浅井良策)」「第20章 様態・結果動詞の多様性に関する一考察(境倫代)」「第21章 意志性、道具的 with / デ、そして only / ダケとのインタラクション(佐野まさき

(真樹))「第22章 中国語の義務的付加詞使役構文の統語構造と百科事典的制約(于一楽)」「第23章 代用形述語としての「そうだ」(岸本秀樹)」「第24章 語用論的な意味はどこまで語彙項目の意味か——補助動詞テオクから考える——(中谷健太郎)」を収める。末尾に「あとがき」と索引を付す。(川島拓馬)

(2025年6月10日発行 大阪大学出版会刊 A5判横組み 460頁 定価7,700円 ISBN 978-4-87259-842-1)

青野順也著『上代日本語における時間・主観表現形式の研究』

本書は、時間表現や主観表現を担う上代日本語の助動詞・終助詞等に考察を加えたものである。『万葉集』を主たる資料として、活用形の衰退や卓越、助動詞・終助詞としての成立過程や発達などについて言及している。

本書の構成は、全2部8章からなる。「凡例」に続く「第一部 時間表現形式」には以下の3章を収める。「第一章 助動詞「り・たり」の未然・已然形」「第二章 「てむ・なむ」と係り結び」「第三章 助動詞「つ・ぬ」の差異と下接語」。続く「第二部 主観表現形式」には以下の5章を収める。「第一章 助動詞「む・らむ・けむ」とク語法」「第二章 複合形式「なむ」と上二・下二段動詞の活用形」「第三章 助動詞「まし」の成立と接続助詞「を・ものを」「第四章 助動詞「べし」の表記と意味」「第五章 終助詞「な・ね」と希望表現」。末尾に「初出一覧」「あとがき」「索引(用語、人名・書名、歌番号)」を収める。(竹村明日香)

(2025年6月20日発行 和泉書院刊 四六判縦組み 208頁 定価3,850円 ISBN 978-4-7576-1125-2)

安田敏朗著『ローマ字運動がかがやいていた時代——弁護士・森叡の言語運動——』

本書は、近代日本のローマ字運動を支えた一人である弁護士・森叡(かおる)に焦点を当て、彼の言語運動の軌跡を描き出したものである。日本ローマ字会に入会した森は、自ら「日本語をよくする会」を設立し、判決文の口語化や、軍隊用語のわかりにくい漢語を平易に言い換える「ことばなおし」を行うなど行動的な人物であった。戦前・戦中・戦後にかけての時代背景とも絡めつつ、ローマ字運動の多面性を伝える一書である。

本書は全8章からなる。「序章 ローマ字運動がかがやいていたのか」「第一章 森叡という人物」「第二章 森叡の一九二〇年代——判事から弁護士、そして「統一主義」へ——」「第三章 森叡における言語運動の実践①——ローマ字運動への参加と「日本語をよくする会」の結成——」「第四章 森叡における言語運動の実践②——判決文口語化をもとめて——」「第五章 森叡における言語運動の実践③——「ことばひろい」と「ことばなおし」——」「第六章 森叡と「ローマ字運動の本質論争」——一九三〇年代後半の日本ローマ字会をめぐる社会状況——」「第七章 『口語辞典』をめぐる——「ことばなおし」の到達点——」「第八章 「大東亜戦争」下の日本ローマ字会、そして森叡」「終章 敗戦後のローマ字運動・点描」。最後に「あとがき」

と「人名索引」を付す。(竹村明日香)

(2025年6月20日発行 三元社刊 四六判縦組み 692頁 定価5,500円 ISBN 978-4-88303-612-7)

小林千草編, 賢草日本語研究会監修『小林賢次著作集 第一巻——条件表現の史的変遷と接続詞——』

本書は、2013年に逝去した小林賢次氏の著作をまとめたものであり、全六巻からなる『小林賢次著作集』の第一巻にあたる。第一巻は、条件表現の史的変遷、および条件表現の一形態でもある接続詞に関する論文を収録している。

本書は全2部14章からなる。「序章 条件表現の体系とその分類」に続き、「第I部 条件表現の史的変遷」には「第一章 条件表現史概観」「第二章 院政時代における仮定表現——『今昔物語集』をとおして——」「第三章 中世における反実仮定の条件表現——呼応形式の推移を中心に——」「第四章 仮定表現形式「ナラバ」の発達をめぐって」「第五章 『天草本平家物語』における仮定表現——覚一本・百二十句本との比較を中心に——」「第六章 仮定表現形式「タラバ」と「タナラバ」」「第七章 恒常条件の表現から仮定条件の表現へ——虎明本狂言の分析をとおして——」「第八章 「ナラ」「タラ」単独形式の成立」「第九章 順接条件の接続助詞「ト」の成立と発達——狂言台本を中心に——」「第十章 大蔵流狂言台本における逆接条件表現——「トモ」「ドモ」から「テモ」「ガ」への推移——」を収める。「第II部 条件表現の接続詞」には「第十一章 狂言台本における順接仮定条件の接続詞——「サラバ」から「ソレナラバ」へ——」「第十二章 「サテハ」と「スレバ」——条件的接続詞としての消長——」「第十三章 院政・鎌倉時代における接続詞「タダシ」」「第十四章 狂言台本等における接続詞「タダシ」」を収める。末尾に「条件表現史関係 文献目録(一九九五年時点でのまとめ)」「小林賢次自筆書き入れより(編者の解説を含む)」「所収論文の掲載書籍・雑誌一覧(第一巻)」「本書所収の論文解説と未来への展望(宮内佐夜香)」「編者のことば(小林千草)」「賢草日本語研究会より御礼のことば」を付す。(川島拓馬)

(2025年6月25日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 434頁 定価12,100円 ISBN 978-4-8386-0804-1)

持橋大地著『統計的テキストモデル——言語へのベイズ的アプローチ——』

本書は、テキストの統計的なモデル化について解説したものであり、現実に現れる、正解ラベルのないテキストを統計的にどうモデル化して扱うかという教師なし学習について体系的にまとめられている。解説にあたっては、テキストをモデル化する自然言語処理の数理について丁寧に説明し、読者が自分の手で統計的な分析を使いこなせるように意図されている。具体的には文字・単語・文・文書といった各レベルでの統計モデルが扱われている。

本書の構成は以下のとおり。「はじめに」「本書の記法」に続き、テキストが持つ性質について概観した「1 テキストと言語のモデル化」、文字を入口に確率と統計モデルの

基礎について説明した「2 文字の統計モデル」、単語の n グラム言語モデルと単語ベクトルについて説明した「3 単語の統計モデル」、文ベクトルおよび構文解析や品詞解析のためのモデルについて説明した「4 文の統計モデル」、文書の意味的内容を数学的に表現する様々なモデルについて説明した「5 文書の統計モデル」。次いで「付録」として、ディリクレ分布の積分と期待値、ディリクレ分布の α のベイズ推定、Jensen の不等式について紹介されている。各章の終わりには演習問題と文献案内が整備され、読者の学習に資するようになっていく。末尾に「あとがき」と索引を付す。(川島拓馬)
(2025 年 6 月 27 日発行 岩波書店刊 A5 判横組み 400 頁 定価 5,060 円 ISBN 978-4-00-006976-2)

**小林芳規著、小林芳規・山本真吾・川野絵梨索引編者『平安時代の漢文訓読史の研究Ⅹ
—訓読語要語索引—』**

小林芳規著『平安時代の漢文訓読史の研究』(汲古書院) 全 10 冊の最終巻である。『平安時代の漢文訓読史の研究』(以下、本書) で取り上げられてきた漢文訓読語の語彙索引及び事項索引を取めることを主とし、併せて『加点識語収覧』(本書第八冊) に所掲の書名索引と僧名・僧房名索引も載せている。

「凡例」に続く「語彙索引(川野絵梨編)」には、本書の第八冊を除く、第一冊～第九冊に出現する古訓点資料等から引用された例文中に見られる語彙(和訓・字音)のうち、主要なものを載録している。「事項索引(山本真吾編)」では、人名・国語事象に係る用語等を採用し、五十音順に配列している。「第八冊『加点識語集覧』書名索引(小林芳規編)」は、本書第八冊『加点識語集覧』の書名を取り上げたものであり、「第八冊『加点識語集覧』僧名・僧房名索引(小林芳規編)」は、『加点識語集覧』の奥書識語等に記された僧名及び僧房名を取り上げたものである。末尾に、「平安時代の漢文訓読史の研究全十冊 正誤表(一) 冊の構成及び章立の変更」「平安時代の漢文訓読史の研究 全十冊 正誤表(二) 記述の字句及び用例の訂正等」「後記(小林芳規)」を付す。(以上、書名等の旧字体は新字体に改めた)(竹村明日香)

(2025 年 7 月 8 日発行 汲古書院刊 A5 判縦組み 396 頁 定価 14,300 円 ISBN 978-4-7629-3600-5)

馬雲著『字順が逆転する二字漢語の日中対照研究』

本書は、日本語の「紹介」と中国語の「介紹」、日本語の「平和」と中国語の「和平」などのように、二字からなる漢語のうち、構成要素である前字と後字が互いに逆転した語形をもつもの(字順逆転漢語)について論じたものである。まず、辞書による悉皆調査を行って日本語と中国語における字順逆転漢語のリストを作成し、それらに対して共時的および通時的な観点から考察を行っている。前者に関しては、日中両言語における字順逆転漢語の分類ごとの実数を調査して字順逆転漢語相互の意味関係を分析し、後者に関しては、日中両言語における字順逆転漢語の欠落している部分についてその背景を

分析している。

本書は全2部12章からなる。「まえがき」と「序章」に続き、「第1部 字順逆転漢語の共時的考察」には「第1章 現代日本語と現代中国語ともに「AB-BA」のある字順逆転漢語」「第2章 現代日本語に「AB-BA」があり現代中国語に「AB」のみある字順逆転漢語」「第3章 現代中国語に「AB-BA」があり現代日本語に「AB」のみある字順逆転漢語」「第4章 現代日本語に「AB-BA」があり現代中国語にどちらもない字順逆転漢語」「第5章 現代中国語に「AB-BA」があり現代日本語にどちらもない字順逆転漢語」「第6章 現代日本語に「BA」のみあり現代中国語に「AB」のみある字順逆転漢語」を収める。「第2部 字順逆転漢語の通時的考察」には「第7章 現代中国語に「BA」が欠落している字順逆転漢語」「第8章 現代日本語に「BA」が欠落している字順逆転漢語」「第9章 現代中国語に「AB」と「BA」が欠落している字順逆転漢語」「第10章 現代日本語に「AB」と「BA」が欠落している字順逆転漢語」「第11章 現代日本語に「AB」が欠落し中国語に「BA」が欠落している字順逆転漢語」を収める。次いで「第12章 研究回顧と今後の課題」を置き、末尾に「添付資料：字順逆転漢語の分類表」「あとがき」「索引」を付す。(川島拓馬)

(2025年7月15日発行 武蔵野書院刊 A5判横組み 288頁 定価12,650円 ISBN 978-4-8386-0807-2)

落合哉人著『「打ちことば」の研究——モバイルメディアコミュニケーションから再考する日本語——』

携帯メールやLINEをはじめとしたインターネットへの接続を介して交わされることばを一括して「打ちことば」と呼ぶことがある。本書は、「打ちことば」の存在を所与のものとはせず、話しことばや書きことばとは異なる形で複数のモードに共通する特徴を見出せるかどうかを、言語使用の側面から実証的に検討するものである。また本書で扱われている、コンピュータ等を介して行われるコミュニケーション(Computer-Mediated Communication (CMC))に関しては英語圏を中心に一定の研究史を持ち、本書ではそうした国外での研究動向を踏まえ、日本語を対象とした本格的なCMC研究の確立が目指されている。具体的な分析にあたっては、メディア・モードごとの違いに基づいて言語使用の一部が説明できるとする仮説を提示し、その仮説の検証を通じて接続詞、感動詞、接続助詞、終助詞、指示代名詞といった具体的な言語要素の使用実態を明らかにしている。

本書の構成は以下のとおり。「第1章 本書の社会的背景と学術的背景」「第2章 先行研究概観」「第3章 対象とするデータ」「第4章 「打ちことば」の基礎的観察と言語量仮説」「第5章 文・節から独立して現れる要素の観察」「第6章 文・節の末尾に現れる要素の観察」「第7章 文・節の内部に現れる要素の観察」「第8章 「打ちことば」の基盤的特徴に対する考察」「第9章 おわりに」。末尾に「あとがき」と索引を付す。(川島拓馬)

菊澤律子・小磯花絵・朝日祥之著『やさしい社会をみんなで創るために——コミュニケーション共生科学への誘い——』

本書は、コミュニケーションに何らかの不自由を抱えている人々がのびのびと活躍できる社会をめざす「コミュニケーション共生科学の創生」というプロジェクトグループの研究成果報告である。視覚障害者、ろう者、手話研究など、各領域の研究会で参加者の関心が高かった内容を文字化して一般向けの書に仕立てたものである。「コミュニケーションの未来を創る」シリーズ（全10巻構成）の第1巻に当たる。

本書は全2部の構成からなる。「はじめに——コミュニケーション共生社会実現にむけて——（菊澤律子）」に続く「第1部 コミュニケーションの未来を創る——誰にとってもやさしい社会を実現するには——（菊澤律子）」には、「はじめに」「1 「コミュニケーション」とは？」「2 「日本語をしゃべってほしい」は幻想」「3 「コミュニケーション共生科学」とは？」「4 本シリーズのプロジェクトと私たち」「5 共生社会にむけて——ミライの社会・シャカイの未来——」を収める。「第2部 日常生活に散らばる言語やコミュニケーションに目を向ける（小磯花絵・朝日祥之・菊澤律子）」には、「国立国語研究所の役割——言語生活に起きていることをとらえる——」「生物学的に人間に言語に特化した器官はない」「何かを変えようとは小さな実現を積み重ねていくということ」を収める。末尾に、「プロジェクトのこれまでの取り組み」「プロジェクト各研究班の進捗状況」「プロジェクト関連書籍のご案内」「コミュニケーション共生科学の創成 公式ウェブサイトのご案内」「サポートメンバーによる編集後記（桂融・白川憩・文学通信編集部）」を収める。（竹村明日香）

(2025年7月31日発行 文学通信刊 A5判縦組み 96頁 定価1,430円 ISBN 978-4-86766-101-7)

杉戸清樹著『言語行動論考』

本書は、日常生活や社会活動の中で言語が用いられる姿ややり取りされるさま、すなわち「言語生活」「言語行動」に関する著者の諸論考を収録したものである。言語行動に向かう足場・よりどころという位置づけで社会言語学・言語生活研究を取り上げた第I部～第II部、言語行動の基本的な広がりや研究姿勢を概観した第III部、各論として言語行動の具体的な姿を取り上げた第IV部～第V部、特論として待遇表現・敬意表現を扱った第VI部、言語表現類型に焦点を当てた第VII部といった内容を備える。

本書は全7部39章からなる。「まえがき」に続き、「第I部 言語行動を見つめる足場〈その1〉社会言語学という足場」には「第1章 社会言語学——入り口案内——」「第2章 社会言語学の視野」「第3章 日本の社会言語学におけるコミュニケーション研究」「第4章 社会を立ち現われさせることば——一つの言語観——」を収める。「第II部 言語行動を見つめる足場〈その2〉言語生活研究という足場」には「第1章 言語生

活—入り口案内—」「第2章 言語生活研究の観点」「第3章 職場での敬語」「第4章 コラム 定点経年調査(1)」「第5章 コラム 定点経年調査(2)」を収める。「第Ⅲ部 言語行動というコトの広がり」には「第1章 言語行動—入り口案内—」「第2章 言語行動というコトの研究」「第3章 言語意識」「第4章 言語行動への視点」を収める。「第Ⅳ部 言語行動へのさまざまな視線」には「第1章 広がりへの視線—表現行動としての言語行動—」「第2章 地域性への視線(1)—地域社会と言語行動—」「第3章 地域性への視線(2)—行動の中の方言—」「第4章 対照する視線(1)—言語行動の対照—」「第5章 対照する視線(2)—ドイツ人と日本人の敬意行動—」「第6章 日本語非母語話者への視線—もう一つの日本語教育を—」を収める。「第Ⅴ部 言語行動の姿をとらえる」には「第1章 「あいさつ」への入り口—「無意味性」と「定型性」—」「第2章 あいさつの言葉と身ぶり」「第3章 「お礼」への入り口—お礼を言うか言わないか—」「第4章 お礼に何を申しませう?—お礼の言語行動についての定型表現—」「第5章 「同じ」店、「同じ」味、「同じ」ことば—郊外レストランのきまり文句—」「第6章 ことばのあいづちと身ぶりのあいづち」「第7章 言語行動における省略」を収める。「第Ⅵ部 言語行動としての待遇表現・敬意表現」には「第1章 何が敬語か?」「第2章 待遇表現の広がり—事典項目の記述として—」「第3章 気配りの言語行動」「第4章 待遇表現としての言語行動—「注釈」という視点—」「第5章 敬意表現の広がり—「悪いけど」と「言っていないなあ」を手がかりに—」「第6章 配慮の言語行動をどうとらえるか」「第7章 敬意行動の中の敬語を—敬語教育の課題—」を収める。「第Ⅶ部 言語行動についての言語行動 「メタ言語行動表現」という手がかり」には「第1章 インタビュー 「なぜメタ言語行動表現を?」」「第2章 連載コラム メタ言語行動表現への視線」「第3章 言語行動についてのきまりことば」「第4章 メタ言語行動の視野—言語行動の「構え」を探る視点—」「第5章 メタ言語行動表現のメカニズム」「第6章 言語行動を説明する言語表現と丁寧さ」を収める。次いで「附章 言語行動への視座—四つの研究領域に身を置いて—」を置き、末尾に「あとがき」と索引を付す。(川島拓馬)

(2025年7月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 594頁 定価11,000円 ISBN 978-4-8234-1275-2)

小林千草編, 賢草日本語研究会監修『小林賢次著作集 第二巻—条件表現・否定表現・反語表現—』

本書は、故小林賢次氏の著作をまとめたものであり、中世から近世を中心とした条件表現・否定表現・反語表現とその変遷に関する論文を収録している。

本書は全3部14章からなる。「第一部 条件表現」には「第一章 条件表現史にみる文法化の過程」「第二章 完了性仮定と非完了性仮定の分類について—補説・大蔵虎明本の「タラバ」—」「第三章 順接の接続助詞「ト」再考—狂言台本にみる近代語条件表現の流れ—」「第四章 確定条件の表現形式の地理的分布と史の変遷」「第五章 仮定条件の表現形式

の地理的分布と史の変遷」「第六章 『浮世風呂』におけるト・バ・タラ」「第七章 森鷗外『舞姫』における条件表現——近代文語文の読解と文法指導——」を収める。「第Ⅱ部 否定表現」には「第八章 否定表現の変遷——「あらず」から「なし」への交替現象について——」「第九章 「ゴザナイ」と「ゴザラス」,「オリナイ」と「オリヤラス」,「オヂヤラス」——その消長と待遇法——」「第十章 院政・鎌倉時代におけるジ・マジ・ベカラズ」「第十一章 院政・鎌倉時代における否定推量・否定意志の表現——ジ・マジ・ベカラズの周辺——」「第十二章 「バシトモ覚エズ」考」「第十三章 室町時代における否定推量・否定意志の表現」を収める。「第Ⅲ部 反語表現」には「第十四章 反語表現における文語性と口語性——元和卯月本謡曲と大蔵虎明本狂言とを比較して——」を収める。末尾に「引用・参考文献」「小林賢次自筆書き入れより（編者の解説を含む）」「所収論文の掲載書籍・雑誌一覧（第二巻）」「本書所収の論文解説と未来への展望（田和真紀子）」「編者のことば（小林千草）」「賢草日本語研究会より御礼のことば」を付す。（川島拓馬）

（2025年8月20日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 318頁 定価11,000円 ISBN 978-4-8386-0809-6）

小田勝著『源氏物語全解説 第三巻——葵 賢木 花散里 須磨——』

本書は、日本語学の立場から『源氏物語』の解説を試みたものである。全11巻構成のうちの第3巻に当たる。『源氏物語』の本文に対して文法的説明を与えることに主眼が置かれている。

「第三巻凡例」に続き、「第九帖 葵」「第十帖 賢木」「第十一帖 花散里」「第十二帖 須磨」を収める。末尾に、「既刊分補正」「あとがき」「索引（事項・作中和歌初句索引）」を付す。（竹村明日香）

（2025年8月25日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 532頁 定価9,350円 ISBN 978-4-7576-1127-6）

角岡賢一著『上方落語に見る江戸明治期の社会とことば』

本書は、筆者の博士論文（一橋大学大学院に提出）に基づくものである。上方の落とし噺を題材に、社会言語学的な視点から分析を加えている。上方言葉に見られる音声的・音韻の特徴や人称代名詞などについても言及がある。

本書は、全12章からなる。「端書き」「凡例」「第一章 はじめに」「第二章 江戸期の社会」「第三章 明治以降の社会」「第四章 京ことばと船場ことば」「第五章 上方言葉に見られる特徴的な音声的・音韻の変化について」「第六章 商家の噺」「第七章 長屋の噺」「第八章 お茶屋噺」「第九章 侍言葉」「第十章 旅ネタ」「第十一章 女性語と子供語」「第十二章 結び」。末尾に「参考文献」と「索引」を付す。

なお本書は、龍谷大学国際社会文化研究所叢書第36巻として、研究助成と出版助成を受けて刊行された。（竹村明日香）

（2025年8月25日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 344頁 定価6,930円 ISBN 978-4-8011-1015-1）

山口仲美著『男が「よよよよよ」と泣いていた——日本語は感情オノマトベが面白い——』

本書は、日本人の泣く声や泣く様子、そして笑う声や笑う様子が、オノマトベでどのように表現されてきたのかを紹介する書である。用例だけでなく図や写真も多く掲載し、一般の人々にも読みやすい内容となっている。

本書は全8章からなる。「はじめに」「この本での表記」「第1章 男が「よよ」と泣いていた——男と女の泣き声の歴史——」「第2章 男は「はらはら」女は「さめざめ」——泣く様子の歴史——」「第3章 男が「ほほ」と笑っていた——笑い声の歴史——」「第4章 戦場の「どっ」と笑い——集団の笑い声の歴史——」「第5章 「にこにこ」対「にやにや」——笑顔の歴史——」「第6章 笑い声「ゑらゑら」の系譜」「第7章 不審な笑い声「きやうきやう」と「きうきう」」「第8章 日本語オノマトベの力」。末尾に「あとがき」と「注」を付す。(竹村明日香)

(2025年8月30日発行 光文社刊 新書判縦組み 416頁 定価1,254円 ISBN 978-4-334-10739-0)

近代語学会編『近代語研究 第二十五集——小松寿雄先生卒寿記念論文集——』

本書『近代語研究』第25集は、近代語学会の元代表である小松寿雄氏の卒寿記念として編まれたものである。「はしがき」「小松寿雄先生略年譜」「小松寿雄先生著作略目録」に続き、〔小松先生との思い出〕として、「恩人、小松さん(坂梨隆三)」「小松寿雄先生のこと(兵藤裕己)」を取める。その後以下29編の論文を取録する。「江戸語の致ス付 致される(小松寿雄)」「漢語の意味と用法の拡がりについての一考察——「活計」と「克己」を中心として——(坂詰力治)」「国立国会図書館蔵百二十句本『平家物語』の資料的価値について(今野真二)」「伝書系女中ことば集から女性書系女中ことば集へ(松井利彦)」「『頭書増補節用集大全』五行本四態——世界図付録は元禄六年をさかのほらない——(佐藤貴裕)」「寛政期金沢方言談話資料『卑陋瑣言』について(矢田勉)」「長母音と長子音の交替(肥爪周二)」「鈴木胤の「コ、ロ」——『言語四種論』読解・続々——(小柳智一)」「『破落戸』小考(長崎靖子)」「『衛星』の語史とその周辺について——江戸時代後期から明治時代を中心に——(米田達郎)」「『文機活法』における「シム(令)」「イタス(致)」の用法(山田潔)」「明治十年刊繁昌記の振仮名表記システム(荒尾禎秀)」「漢語の成立事情について——「皮肉」は漱石・芥川の手によったか——(丸田博之)」「山田文法における「熟語」——構成要素が並立関係にあるものをめぐって——(玉村禎郎)」「品詞分類の理念(井島正博)」「テキストにおける語の出現頻度と出現位置——動的な語彙論の確立のために——(山崎誠)」「暑さに関する程度表現(榎橋比早子)」「明治大正期における都市間競争としての「標準語」(村上謙)」「明治後期以降における尊敬表現「お／ご～になる」(伊藤博美)」「漱石作品の「ちまう」「てしまう」について(北澤尚)」「S. R. ブラウン著『Prendergast's Mastery System』の成立について(常盤智子)」「『自由之理』における外国語のカタカナ表記の記載方法——外来語への道程——(木村一)」「幕末明治初期「放課」の成立と「放課後」「休み時間」への転換(園田博文)」

「静嘉堂文庫蔵『改正増補蛮語箋』巻一写本について——草稿であることと『模理損字書』が利用されたことの指摘——（櫻井豪人）」「近世後期江戸語における「お～だ」——テイル形・テイタ形に言い換えられる場合に着目して——（山田里奈）」「近世後期洒落本の会話文に見られる語彙の使用者の男女差（市村太郎）」「短単位 N-gram でみる洒落本コーパス——東西差・男女差の概観——（渡辺由貴）」「洒落本資料から見る「で+は」の融合音訛形の東西差——指定辞テ+係助詞ハと格助詞テ+係助詞ハを中心に——（岡部嘉幸）」「初期近代語の接頭辞に関する一考察——土井本『太平記』の「接頭辞サシ+動詞」の意味を中心に——（田和真紀子）」。末尾に「執筆者略歴」を付す。（竹村明日香）

（2025年9月19日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み・横組み 642頁 定価18,370円 ISBN 978-4-8386-0811-9）

鯨井綾希著『語彙と文章の計量的日本語研究』

本書は、探索的な計量分析を通して語彙と文章の係り関係を捉えた論考をまとめたものであり、同一語句の繰り返し、および語彙と文章におけるまとまりという切り口から論じられている。また同時に、日本語学において求められる計量法の検討、定量的な視点に基づいた日本語研究の発展性について問題意識を投げかけることも意図されている。これを通じて、新たな計量日本語学の確立が目指されている。

本書は全2部16章からなる。「はじめに」「序章 計量的日本語研究の発展に向けて」に続き、「I 文章中における同一語句の繰り返しの量的様相」には「第1章 同一語句の繰り返しという研究視座」「第2章 同一語句の繰り返し量の多寡と文体変化」「第3章 表現媒体の違いと同一語句の繰り返し」「第4章 学校教科書から見た同一語句の繰り返し場面」「第5章 接続表現による場面転換と同一語句の継続使用」「第6章 接続表現による場面転換と同一語句の繰り返し量」「第7章 文章組織に連動する同一語句の繰り返しの使用原理」「第8章 使用原理の補論」を取める。「II 語彙と文章を結ぶ定量的なまとまり」には「第9章 語彙のまとまりと文章のまとまり」「第10章 母語話者と学習者の文章に見られる語彙的差異」「第11章 母語話者と学習者の文章に見られる語彙運用」「第12章 母語話者と学習者の文章に見られる語彙ネットワーク」「第13章 内容展開に伴う語彙的結束性の形成過程」「第14章 語彙の計量から考える文章の一まとまり性」「第15章 文章中における品詞構成と表現構造との相互関係」「第16章 文章データを用いた語彙の分類試論」を取める。末尾に「終章 計量日本語学の確立に向けて」と索引を付す。（川島拓馬）

（2025年9月22日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 368頁 定価7,480円 ISBN 978-4-8234-1300-1）

沖森卓也・合山林太郎編著『日本漢文を読む [近世編]』

本書は、江戸時代及び明治時代前期の漢文・漢詩について概説したものである。江戸

時代以降、漢学は人々に広く浸透し、社会の基礎的教養となった。儒学や経書解釈において新たな展開が起こる一方で、蘭学などの新興学問においても漢文は書記言語として用いられた。また、漢詩で日々の情緒や人生の有り様を表現したり、狂文や狂詩が作られるなど、文芸の世界にも新たな一面がもたらされる。本書ではこうした学問・文芸・都市文化など多角的な視点から選ばれた漢文資料に詳細な注解を付している。

本書は、全3部15章からなる。「序（合山林太郎）」に続く「第1部 学びと漢文」には、「第1章 経学Ⅰ 論語訓点（齋藤文俊）」「第2章 経学Ⅱ 荻生徂徠（齋藤文俊）」「第3章 詩文Ⅰ 注・評と本文——『唐詩選』関係書を例に——（合山林太郎）」「第4章 詩文Ⅱ 江戸漢詩（合山林太郎）」を収める。「第2部 知識と漢文」には、「第5章 学術Ⅰ 名物学（沖森卓也）」「第6章 学術Ⅱ 『解体新書』（木村一）」「第7章 歴史Ⅰ 『本朝通紀』（杉下元明）」「第8章 歴史Ⅱ 『日本外史』（杉下元明）」を収める。「第3部 生活と漢文」には、「第9章 紀行Ⅰ 月瀬の梅林（湯本優希）」「第10章 紀行Ⅱ 杉田と耶馬溪（湯本優希）」「第11章 伝記Ⅰ 伝（堀口育男）」「第12章 伝記Ⅱ 顕彰碑・墓碑（堀口育男）」を収める。「第4部 和と漢の間」には、「第13章 狂文（小林ふみ子）」「第14章 狂詩（小林ふみ子）」「第15章 繁昌記（合山林太郎）」を収める。各部の末尾に「参考文献」を付す。（竹村明日香）

（2025年10月1日発行 朝倉書店刊 A5判縦組み 176頁 定価3,740円 ISBN 978-4-254-51691-3）